

日米医学医療交流財団 研修助成

研修報告書 (2014年度 助成者)

作成日 2014年10月19日

氏名 (フリガナ)	村上 美晴 (ムラカミ ミハル)
研修名・研修地	アメリカ短期看護研修 (アメリカ・オレゴン州ポートランド市)
研修期間	2014年10月12日 (日) ~ 10月18日 (土)
所属機関名 身 分	名古屋第二赤十字病院 救急外来看護師

今回の研修を通して印象的だったのは、アメリカでは日本よりも看護師の地位が確立されており、看護師としての誇りと自信を持って仕事をされている方たちが多いという点です。もちろん、私を含めた日本の看護師も自分たちの仕事に責任と誇りを持って取り組んでいると思いますが、日々の病院業務において、やはり“医師の診療の補助”という概念は完全に払拭できていないと感じる点は多々あります。また、日本よりも様々な職種で仕事分担ができており、他職種と協力して看護・医療を提供することができているため、自らの仕事にも集中しやすい環境である印象を受けました。加えて、看護の教育体制やプロトコールも十分に作成されており、看護師としての自信や誇りを築けるようなサポート体制も日本より整っているように感じました。

私自身が救急外来で勤務させていただいているので、研修を通して興味深かったのが ER や AMR での見学でした。ER では当院と異なり全個室体制でプライバシー保護に努めていたり、ER 内で区分わけを行い個室が 58 個もあるというのには本当に驚かされました。また、物品管理やスクラブ管理等も基本的にオートマチックシステムになっており、本当に効率的なシステムだと思いました。やはり日本では無駄と言ってはいけないかもしれませんが、無駄な仕事が多すぎると感じます。AMR では、救急救命士さんがモルヒネまで使用できるという点にはとても驚きましたし、救急車が有料で市の運用ではないという点に関しては日本も見習ってほしいとさえ感じました。また、ここでも救命士さんたちが自身の仕事に誇りと自信を持って取り掛かっている姿がとても印象的でした。

また、一番印象的だった講義は“尊厳死”に関するものです。日本では“尊厳死”は認められておらず、また、どの場所へ行っても“死”というものは倫理的・宗教的・社会的等様々な問題があるため、正解というものがない分、“死”について考えるいい機会をいただくことができました。医療現場で働かせていただいていると、避けて通れない部分でもあるので、とてもいい刺激になりました。また、医療従事者である前に一人の人間としても、自分自身の死や愛する人の死を考えなければいけないとも感じさせていただきました。

最後に、研修を通して色々なバックグラウンドの方たちと交流をもつことができとても充実した日々を過ごすことができました。貴重な経験をさせていただき、関わっていただけたすべてのみなさんに心から感謝いたします。有難うございました。